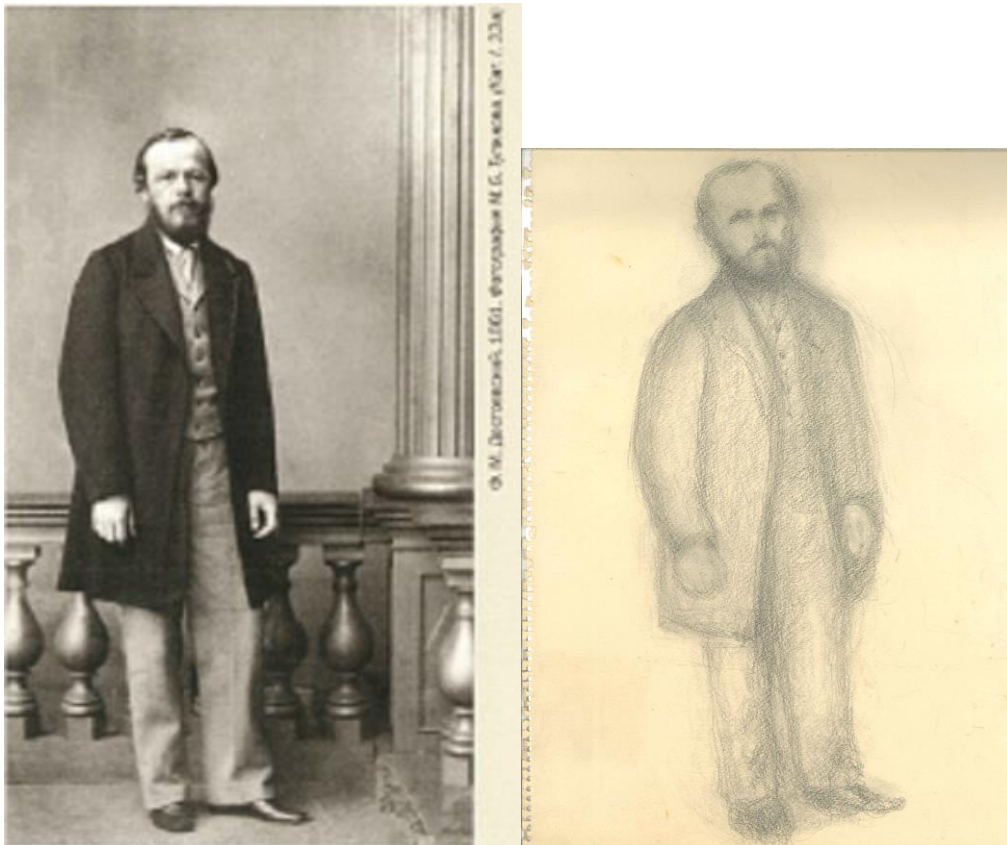


死の家から出てきた男





死の家から出てきた男

小出次雄画

今回紹介するのは、私の恩師小出次雄先生(1901-1989)が描かれたドストエフスキイの肖像画(1983)で、「死の家から出てきた男」というタイトルが付されたものです。同時に付したのはこの肖像画の基となった写真で、1861年にペテルスブルクでM.B.トゥリーノフによって撮影されました。珍しい立ち姿のドストエフスキイです。

前回記したように、ドストエフスキイは政府転覆を計る革命結社に加わったかどで逮捕され(1849年、ペトラシェフスキイ事件)、死刑を宣告されたものの、銃殺の直前に執行を免除されてシベリア流刑となります。これは皇帝ニコライ一世が仕組んだいわば「懲罰劇」でした。1850年から1854年までトボリスクで四年間の懲役生活を送った彼は、その後更に1859年までの5年間セミパラチンスクで兵役生活を送り、1859年に漸くペテルブルクに帰還します。逮捕から始まってほぼ10年間のシベリア生活。この10年の過酷な体験がドストエフスキイをドストエフスキイにしたと言えるでしょう。

この肖像画を前にした時、私はドストエフスキイの立ち姿に不思議な感銘を覚えました。それまでの彼の作品との取り組みから、私にはドストエフスキイというと深刻かつ深遠な思索家というイメージが焼き付いていました。それは前々回のペローフの肖像画が表わす

端正さや鋭さ、そして精神的な奥深さや深刻さと通じるイメージでした。ところがこの肖像画は、「死の家から出てきた男」という題名と、デフォルメされた形姿とが相俟って、どこか遙か遠くを望む謙虚な立ち姿として心に沁み込み、闇から光を望むドストエフスキイの精神のリアリティ、彼の作品の根にあるものを私に強く実感させてくれたのでした。

その後私はドストエフスキイのシベリア体験について色々と考えてきたのですが、彼にとってのシベリアとは、監獄の中で実に様々な囚人との生活を強いられたことで、彼らが体現する善と悪、聖と俗、光と闇、天使性と悪魔性という両極性と正面から向き合わされ、その後彼が人間と世界と歴史を考察する上での「原点」、あるいは「原構図」を与えられたこと、ここに最大の意味があるのではないかと考えています。

ドストエフスキイがシベリアの監獄で手にすることを許されたのは新約聖書のみでした。小林秀雄はこれを、シベリアにおけるドストエフスキイの「聖書熟讀といふ體驗」と言い現わし、決定的に重要な体験であったと見なしています(『白痴』論Ⅱ)。ドストエフスキイは日々監獄で目撃する囚人たちの両極性を、改めて聖書世界の様々な人物たちの内に見出し、これら両世界を往還することで思索を深めていったのだと思います。囚人たちの悪と俗と闇、そして悪魔性を極限化して表現する人物が聖書世界ではユダであったとするならば、善と聖と光、そして天使性を極限まで生きたのはイエスであり、彼はこのユダの裏切りによってゴルゴタ丘上で磔殺されたのでした。新約聖書が伝える一世紀初頭のこのイエスとユダのドラマこそ、それから千九百年近くたったロシアにおいて、ドストエフスキイが彼の生きる現実の中で新たに描くドラマの正に「原型」、「原構図」となるのです。

さてこのイエス・キリストについて、そして真理について、ドストエフスキイがシベリアからフォンヴィーヅナに宛てた手紙にはこう記されています。

「キリストよりも美しく、深く、心を魅きつけ、理性的で、男性的で、そして完全なものは何もありません。ないばかりではありません。妬ましいほどの愛を以って私は自らに言うのです。あり得ようがないと。そればかりではありません。たとえ誰かが私に、キリストは真理の外にあると証明し、また事実、真理はキリストの外にあるとしても、私には、真理と共にあるよりも、キリストと共に留まる方が望ましいのです」(1854)

およそ世にイエス・キリストに関する書物が如何に多く、またこの存在について記した文章もまた如何に多くとも、「美しい」「深い」「心を魅きつける」「理性的な」「男性的な」「完全な」という六つの形容詞を以ってこの存在を言い表した人物はまずいないでしょう。

『死の家の記録』とは彼のシベリア流刑体験の報告書と言うべき見事な作品で、この写真が撮られた1861年から本格的に雑誌に連載され始めます。皆さんが『死の家の記録』と取り組まれる時、この作品とは、この肖像画のドストエフスキイ、つまりイエス・キリストを六つの形容詞と共に心に納め「死の家から出てきた男」が世に送り出しつつあった作品であることを思い起こされると、その味わいは一層深まることでしょう。